（ 続 紙 １ ）

京都大学	博士（教育学）	氏名	根本　真弓
論文題目	対象関係論的心理療法から捉えた青年期女性の分離体験		

（論文内容の要旨）

本論文は，精神分析の中でも Freud,S.－Klein,M.－Bion,W.というクライン派精神分析に依拠した，対象関係論的心理療法の臨床実践から捉えられた青年期女性の分離体験に着目し，内的世界に展開する自己像や対象像，不安，情動，無意識的空想，心的機制などを探究し，分離を困難にする要因の解明を目的として論考された。また，これらの臨床的事実を踏まえ，青年期女性の心理療法に寄与する，セラピストの機能と技法について論じるとともに，心的作業の到達点として面接終結のクライテリアの定式化を試みた。

本論文は，問題の所在と研究の目的を明らかにする序章に始まり，第１部「研究の基盤」，第２部「研究の展開」，第３部「総合的考察」の３部構成とした。

第１部「研究の基盤」では，研究対象である青年期や青年期女性について歴史的・発達的観点から俯瞰するとともに，青年心理学や社会心理学的視座から捉えた青年の健常発達や精神病理の現れを整理し，青年期という時代を総合的に描写した。第２章では，乳幼児の心的世界が精神病理へと連接される精神分析的発達論や，第二次性徴がもたらす乳房や初潮が青年期女性の身体と心的世界に及ぼす影響について明らかにした。第３章において，本研究の主題である「分離体験」を取りあげ，乳房との関係で生じる分離体験が内的対象喪失となりうることを示した。第４章では，本研究の臨床実践手法であり臨床的理解の基盤となる「対象関係論的心理療法」の臨床モデルを明示した。

第２部「研究の展開」では，論者が行った臨床実践をもとに内的対象関係や内的空想，心的機制が詳述され，分離によってもたらされる情動の質的・量的相違が，症状形成や精神病理に連接される青年期女性の分離体験が解明される。事例は，心的水準の異なる７事例が精神病理の重篤なものから順に取りあげられている。第５章第１節では分離の痛みを回避するために用いられた，投影同一化や羨望の観点から，融合的依存欲求，具象的空想，孤独について詳述した。第２節では衝動的行為と行動化による分離の痛みの排泄が，思考機能そのものを破壊することを明らかにした。第６章では分離がもたらす心的苦痛をコンテインする対象の不在に加え，苦痛の出口が塞がれた時，解離という病理に接続されることを詳述した。第７章は過食や性的問題行動が，母親からの分離によって派生した迫害的罪悪感と懲罰的行為であったことを明示した。第８章第１節では分離の痛みが，母親への依存・攻撃感情の否認と取り入れ同一化によって防衛され，見せかけの現実適応がなされていた事例を論述した。第２節ではセラピストとの間に再演された分離体験の現実化を通して，乳幼児期の分離体験が新たな意味を有する体験へと修正される心的過程を明らかにした。第９章では，「西の魔女が死んだ」（梨木香歩，2001）を素材として，健常な思春期女性の分離について考察を加えた。

これらの臨床事例から見出されたのは，身体化・行動化・症状化といった精神病理の背後には，乳幼児期の愛着対象である母親との分離体験が存在し，一時的な分離が内的には愛する母親対象の喪失だと体験されるとともに，心的苦痛の耐えられなさが様々な防衛機制を発動させ，心的発達を妨げていたという臨床的事実である。精神分析では，思春期はエディプス・コンプレックスあるいは早期エディプス状況を，大人の身体で体験する時期であり，性愛状態が始動する発達段階にあるとの共通理解がなされている。しかし，論者の事例から臨床的事実として見出されたのは，エディプス的要因に基づく性愛欲求の発現ではなく，母親への依存感情と破壊的攻撃欲動，罪悪感への囚われによって，母親に逃れがたく固着し続ける青年期女性の姿であり，母親からの分離の困難さであった。

第３部「総合的考察」では，分離によってもたらされる青年期女性の心的世界の特徴と心理療法の展開について総括を行った。**第 10 章第１節「逡巡期 Hesitating stage の提案」において**，青年期女性は，精神分析のオーソドックスな精神・性的発達論の最終段階である「性器期」に到達する前に，母親との間に未消化なままに置かれていた乳幼児期の分離体験，すなわち愛する内的母親の

喪失体験をワークスルーするための発達段階が，ワンステップ存在するという理論的仮説を論者は提言した。そしてこの心的発達の一段階を「逡巡期」と命名した。第２節では，「逡巡期」に見られる青年期女性の特異性を明示するために，「分離への意識がもたらす乳幼児的依存感情の再燃と性愛的感情」「性と連接された身体的変化がもたらす内的空想」「母親との関係における，取り入れと排泄の二重性」「外傷的分離体験と孤独」の４つの観点から論考し，青年期女性の心的世界をより詳細に描写した。

第 11 章では，「逡巡期」にあって分離の主題と格闘する青年期女性の，対象関係論的心理療法におけるセラピストの機能と技法について論者の考えを示し，発達途上にあるクライエントの心的作業の到達点はどこにあるのか，何をどこまでワークスルーすることが可能なのかについて論じ，青年期女性における面接終結のクライテリアの定式化を行った。

青年期女性が，乳幼児期の分離体験によって失われていた母親対象の再摂取と，そこからの分離を達成し，身体的変貌と性的自己を受け入れ，成熟した女性として異性愛へと到達するには，依存と攻撃感情に彩られた乳幼児期の情動的経験を現実化し，良い母親対象を再獲得するための期間として「逡巡期」を必要とするというのが論者の主張である。そしてこの分離体験のワークスルーは，青年期女性が異性との安定した性愛関係や愛情関係を築くための基盤となるだけでなく，赤ん坊の母親として，また赤ん坊の激しい依存感情や破壊的攻撃感情にもちこたえる精神的成熟と忍耐力を付与するのである。本研究では，青年期女性の分離体験を内的世界から捉え直し，そこで生まれる内的空想と精神病理の解明を通して，「逡巡期」という発達段階を見出し，そこに展開する青年期女性の心的世界をより深く探究することに加え，その理解を心理療法実践へと接続することで心理療法過程に新たな視点を付与したと言えよう。今後の課題として，「逡巡期」以降のエディプス・コンプレックスや異性愛への移行部分への検討が示唆され，本論文は締めくくられている。